

聖書：ヨハネの黙示録 21：22～27

説教題：諸国の民の栄光と誉れ

日時：2021年11月7日（朝拝）

ヨハネは黙示録の最後の2つの章で新しい天と新しい地における教会の祝福された状態についての幻を記しています。御使いは21章9節で「ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう」とヨハネに言いました。「子羊の妻である花嫁」とは教会のことです。罪の汚れから完全に聖められ、救いの最終状態に達した教会のことです。そうして見せられたのが10節以降に記されている聖なる都、新しいエルサレムの姿でした。この新しいエルサレムとは単にクリスチャンが将来住む場所を描いたものではなく、教会自身のことです。キリストの花嫁としてついに美しく整えられた教会の姿が、聖なる都という象徴的表現によって描かれているのです。前回に見た9～14節では遠くから見た都の姿が記されました。また前回に見た15～21節では、より近くに寄って、都の寸法や材料のことが述べられました。そして今日の22～27節では都の内部、その生活の様子が描かれます。

まず今日の箇所ではヨハネが伝えていること、それは都の中に神殿を見なかった！ということです。エルサレムの都といえば何と言っても神殿です。エルサレムをエルサレムたらしめているのは神殿がその町にあることです。神殿は神がともにいてくださるしるしであり、そこに行けば神とお会いできるという場所です。ところが新しいエルサレムにはそれがない！どういうことなのか。その答えとしてヨハネは22節後半で「全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである」と述べています。

神殿は何のためにあるものでしょうか。それは先に述べた通り、神とお会いし、神と交わるためです。神がそこにいてくださると信じるからこそ人々は神殿に来ます。と同時に神殿にはもう一つの側面があります。それは聖なる神に近づく危険から罪人を守ることです。罪ある私たちは聖なる神には容易に近づけません。ヘブル人への手紙12章29節：「私たちの神は焼き尽くす火なのです。」従って神殿は神との間に一定の距離が保たれる構造となっています。神がおられる至聖所までには壁があり、いけにえをささげる場所があり、またカーテンがあります。その一番奥の部屋には民を代表してたった一人の人、大祭司が入って行けるだけであり、しかもそれは年に一度だけでした。このように神殿は神との距離感を感じさせるものでもありました。神殿

があることによって神は近くにおられるようでありながら、一方ではかなり遠い。神殿があることは慰めでありつつ、同時に神に近づく危険を人に意識させるものでもありました。

しかし新しいエルサレムでは、もはやそういう物理的な神殿は不要です。罪人が神に受け入れられるための完全ないけにえがささげられたからです。神の民は今やキリストを通して神の前に義と認められている「義認」ばかりか、「聖化」のプロセスを最後まで進んで、完全に聖められた「栄化」の状態に達しています。ですからもはや地上にあったような目に見える神殿は不要なのです。神は都の至るところにおられ、ご自身を隠すことなく彼らに示されます。人はどこにおいてもこの神に直接近づき、最も親しく最も祝福に満ちた交わりに生きる者とされるのです。

また神殿がないばかりか、23 節には「都は、これを照らす太陽も月も必要としない」とあります。もし今日、太陽がなければ世界は真っ暗闇となり、私たちは生活ができません。ところがやがての世界ではそれらが不要だと言います。なぜなら「神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである」と。ある人は、ではやがての世界には太陽や月がないのかと思うかもしれませんが。しかしそこまではこの箇所は語っていません。この箇所が述べているのは、やがての世界で天体はあるのかないのかではなく、太陽や月の光を全く必要としないほど、それらにはるかに勝る神の力強い祝福の光が都を照らすということです。「都」とは先に述べた通り、教会のことです。神の栄光と子羊の明かりが私たちの上に豊かに注がれるのです。光はそれを見る者、それを浴びる者にいのちをもたらし、暖かさをもち、また希望、励まし、力を与えるものでしょう。私は時々、朝、東向きの窓から朝日を浴びると、それだけで大きな力、元気、勇気をもたらすような気持ちになることがあります。神が直接的な交わりを通して、そのように都を、教会を、私たち一人一人を豊かに、完全な祝福の光で照らしてくださいます。イザヤ書 60 章 19～20 節：「太陽はもはや、あなたの昼の光とはならず、月の明かりもあなたを照らさない。主があなたの永遠の光となり、あなたの神があなたの輝きとなる。あなたの太陽はもう沈むことがなく、あなたの月は陰ることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。」

さて 24 節では、そこにいる人々に目が移されます。24 節最初に「諸国の民は都の光によって歩み」とあります。ある人はここで戸惑うかもしれません。先に都は教会

のことだと申しあげました。しかしここでは、その都の中で生きる諸国の民が出て来ます。都もクリスチャンで、諸国の民もクリスチャンであるとは、イメージが混乱していないかと思うかもしれません。しかしこれは黙示文学ゆえのことです。同じようなことはこれまでもありました。19章7～8節では教会が結婚式に備える花嫁にたとえられましたが、そのすぐ後の19章9節では同じクリスチャンが今度は結婚式に招かれたお客さんにたとえられました。花嫁であり、また婚礼の客であるとはどういうことかと私たちは思うかもしれませんが、黙示録は象徴的表現を用いてメッセージを伝えようとするものです。ですからそれぞれのイメージを用いて何を言わんとしているのか、そのメッセージを汲み取るようにすれば良いのです。似たようなことは12章にもありました。そこでは教会が一人の女にたとえられていましたが、同時にその女から生まれる子孫にもたとえられていました。

さて24節の諸国の民とはあらゆる国の人々を指すと考えられます。救われた民の中にはユダヤ人ばかりでなく、多くの異邦人、外国人もいるのです。その諸国の民も都の光によって歩む、すなわち都に注がれる神の光を受けて歩みます。外国人だからと言って差別されません。また24節後半に「地の王たちは自分たちの栄光を都に携えて来る」とあります。イザヤ書60章3～5節：「国々はあなたの光のうちを歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。目を上げて、あたりを見渡せ。彼らはみな集まって、あなたのもとに来る。あなたの息子たちは遠くから来る。娘たちは脇に抱かれながら。そのとき、あなたはこれを見て晴れやかになり、心は震えて、喜ぶ。それは、海の富があなたのところに移され、国々の財宝もあなたのもとに来るからだ。」イザヤ書は後の日に外国の王たちも、ついに主なる神を認めて遠くからやって来ること、神礼拝のために様々な富や財宝を携えて来ることを述べていました。もちろんやがての世界で、救いを受けた王たちが文字通りの富や財宝を持って来るのではないと思います。地上の富や宝は死後その人について行きません。では彼らが携えて来る「栄光」とは何でしょうか。この後26節を見る時にもう少し詳しく述べますが、大雑把に言えば、天に召された後もお彼らに属している良きものすべてと言えるかと思えます。主に栄光を帰し、主を賛美することができるすべてのものです。かつては主を知らず、主に敵対してさえた諸国の王たちも、ただ神の恵みによって信じる者、神の民とされ、今や自分の持てるものすべてをもって神を礼拝する者となるのです。

続く25節に「都の門は一日中、決して閉じられない。そこには夜がないからであ

る。」とあります。古代世界の都は夜になると門が閉じられたようです。それは都の安全と守りのためです。しかしやがての世界には夜がない。暗闇がない。それは罪や悪がないということでもあります。ですから危険がない。いつもともにいてくださる神の祝福の光が満ちています。ですからその門は閉じられないのです。しかしここは前後の節を考慮すると、ただ神の守りを述べようとしたものではないようです。イザヤ書 60 章の 11 節：「あなたの門はいつも開かれ、昼も夜も閉じられない。国々の財宝があなたのところに運ばれ、その王たちが導かれて来るためである。」 ここにあるように都の門が閉じられないのは、諸国の王たちが神礼拝のため、絶えずささげものを携えて都に入るためです。このようにやがての世界はひっきりなしに神への礼拝と賛美がささげられる世界であることが分かります。

そして 26 節に「こうして人々は、諸国の民の栄光と誉れを都に携えて来ることになる」とあります。ここにそうするのは王たちばかりでなく、すべての人々もであることが述べられています。ここに「諸国の民の栄光と誉れ」とありますが、これは何のことでしょうか。「栄光と誉れ」は神と子羊にこそささげられるべきものであることがこの黙示録の中で示されて来ました。4 章 9 節に御座の周りにいる四つの生き物が「栄光と誉れと感謝」を神にささげたとあり、その後の 11 節では 24 人の長老たちも神こそ「栄光と誉れと力」を受けるにふさわしい方だと賛美しました。また 5 章 12 節では多くの御使いが子羊キリストに向かって「誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です」と言いましたし、次の 13 節ではすべての造られた者が神と子羊キリストに「賛美と誉れと栄光と力」を帰す様子が描かれました。ですから今日の箇所でもこれは神と子羊にささげられるものであると言えます。それが「諸国の民の」と言われています。それはこれらはまず彼らに与えられた栄光と誉れではあるが、彼らを通して神と子羊にささげられる栄光と誉れであるということではないでしょうか。

では彼らに与えられた栄光と誉れとは具体的に何のことでしょうか。その一つとして、人間としての栄光また誉れを考えるとと思います。人は神のかたちに造られた者として、神を映し出す栄光と誉れを持つ存在でした。墮落によってそれを大いに傷つけましたが、今や救いの最終状態に至って、それが回復され、神が意図された本来の栄光と誉れを持つ者となりました。その光を輝かせて神を賛美し、神にすべての栄光を帰すのです。またそこには一人一人に与えられたユニークな賜物、特性、能力、働きなども含まれると考えられます。音楽や芸術、文学、また様々な奉仕、そ

の他、真に良いもの、美しいもの、価値あるもの……。それら私たちそれぞれに与えられた何らかの光と良きものが聖められ、高められて、それらはすべて神から来たものであると告白され、神に栄光が帰されるということです。また良い行いもそうであると考えられます。14章13節や19章8節に私たちの地上の良い行いは死んだ後もついて行くとありました。それらをもって神に栄光を帰すということです。このようにやがての世界は神の光を豊かに受けると同時に、すべての祝福はただ神と子羊によると告白し、神に栄光を帰し、神を礼拝する世界であることが伺えます。そしてそこにおいて私たちは完全な満たしを味わう者となるのです。思い起こされるのはウエストミンスター小教理問答の問1、「人の主な目的は何ですか」の問いに対して、「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」とあることです。まさに「神の栄光を現し、神を永遠に喜ぶ」本来の姿が完全に実現するのがやがての世界です。

しかしこの都に入れない人たちのことが27節に記されます。ここはすでに見た21章8節と同じです。これは主を信じずに自らの罪を残したすべての人に当てはまりますが、21章8節で見た通り、焦点は教会に出入りし、名目的にはクリスチャンであったが、実際にはそうでない人、すなわちこの世と妥協し、偶像礼拝や皇帝礼拝に屈した人のことだと考えられます。「汚れたもの」とか「忌まわしいこと」とは特に偶像礼拝と関係しますし、「偽りを行う者」も、信じていると言いながら、そうでない生活をする人を指します。その人は都に入れない。「入ることができるのは、子羊のいのちの書に記されている者たちだけである」とあります。前にも見ましたように、これは子羊キリストに信頼する人であり、たとえ罪を犯しても悔い改めて主に立ち返り、27節前半に記されたような歩みはその人の特徴とはならない人のことです。その人は子羊の力によってこれとは反対の歩みへ進んで行きます。そういう人こそ子羊のいのちの書に名が記されている人であり、都に入る人であると言われています。

以上、私たちは今日の箇所ですらにやがての祝福の世界について見ました。そこには神との最も親しい交わりの生活があります。その神の光の下ですべての闇は消え去り、心から神と交わり、神を味わう生活をします。そしてそれだけではなく、神を心から礼拝して歩みます。諸国の多くの民が自分に与えられた恵みを感謝して、神にすべての栄光と誉れを帰して礼拝します。この日が来ることを前に見つめて、私たちも信仰の歩みを続けたいと思います。

これを今日の私たちへのチャレンジとなるように言い換えるなら次のようになるでしょうか。いわゆる天国の本質は、今日見たように、神との交わりこそを喜びとし、神にすべての栄光を帰す生活です。そこに人間としての本来の最高の生き方と喜びがあります。だとしたら、私たちはやがての日を待たずして、今ここにある時からそのように歩むべきではないでしょうか。地上にある間は神との交わりよりも他のことに喜びを見出して熱中し、また神にではなく自分に栄光を帰して生活する。しかしやがての新しい世界に入ったら突然神との交わりに喜びを見出し、またすべての栄光を神に帰して礼拝することを喜びとするというのは一貫しないことですし、ちぐはぐなことです。また地上でそのように歩んだ人が本当にやがての世界で今見たように歩むことを喜びとできるだろうかという疑問も起こります。やがての新しい世界にあるのは、神こそを喜びとし、神にすべての栄光を帰して礼拝する生活です。これと一致しない生活は消え行くものであり、無駄に終わります。とするなら、かの日を見つめて、今ここからやがての世界に通じる歩みをすべきではないでしょうか。もちろん地上にあるがゆえの限界や弱さの内に私たちはあります。しかしやがて私たちを待つ祝福の世界は今日見て来たようなものなのです！私たちはその日を見つめて、今この地上にある時から神を求め、神と交わり、神の光によって歩む者とされたいと思います。また自分に与えられているすべての良きことをもって神に栄光を帰し、神を礼拝し、そこに最大の喜びと幸せを覚える者とされたい。そうしてやがての日の前味を今ここでも味わいつつ、これが究極的に成就する日をいよいよ待ち望み、日ごとにそこに向かって行く喜ばしき歩みへ導かれて行きたいと思います。